# モーリシャス話題集

## 【国名】

●1638年オランダが植民を開始した際、当時のオランダの英雄ナッサウ家のマウリッツ（Maurits）皇太子の名にあやかって命名。安定した政治と高い経済力で「インド洋の貴婦人」、「エデンの園」、「アフリカのシンガポール」等と呼ばれている。

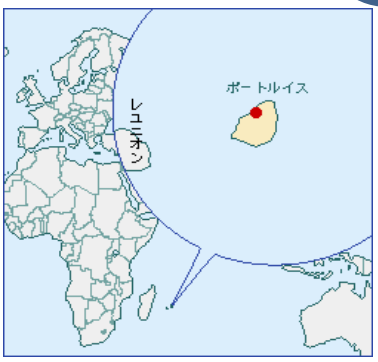
## 【国旗】

●国旗の赤は独立のために　流された尊い血の犠牲を、青は美しいインド洋を、黄は太陽と自由を、緑は実り豊かな農業を象徴。

モーリシャス国旗

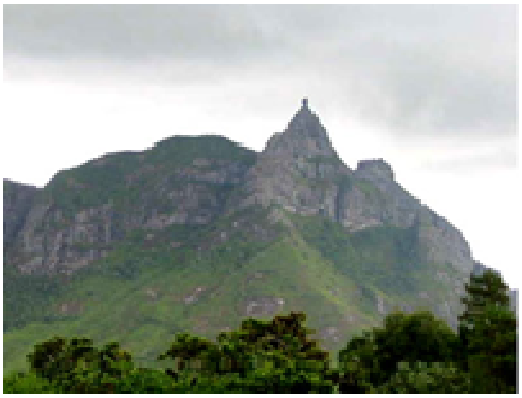
## 【国土】

●1,300万年ほど前、海底噴火の隆起によってできたと考えられ、同国の面積は東京都とほぼ同じ。周囲を珊瑚礁に囲まれ




る島で構成され、気候は温暖湿潤。火山島だが、全体的に標高が低く、最高峰は828mのラ・プチ・リヴィエール・ノワール山。

尖っていたり、ラクダのこぶのようなものがくっついていたりと、形の変わった山がたくさんある。数万年前に活動した火山の名残だが、今は全く活動していない。



【宗教・言語】

●インド人、中国人、アフリカ系黒人、ヨーロッパ系白人によって構成される。

●国民の52%がヒンズー教、30%がキリスト教、17%がイスラム教、0．7%が仏教。

●公用語は英語だが、日常会話ではフランス語、クレオール語も多用され、その他東部パンジャーブ語、グジャラート語、中国語（客家語、北京語）など様々な言語が使われる。ほとんどのモーリシャス人は、最低限、英語、フランス語、クレオール語の３か国語を自由に操る。

【政治】

●モーリシャスは、１９６８年の独立以降、常に選挙を通じた政権交代を実現してきており、議会制民主主義の定着した政治的に安定した国。国際法を遵守するアフリカ随一の民主国家。

●我が国はモーリシャスを独立（１９６８年３月１２日）と同時に承認。２０１７年１月に在モーリシャス日本国大使館実館を開設。

●モーリシャスは、日本の「自由で開かれたインド洋（FOIP）」実現のためのインド洋の要衝。

【主要な産業】

●モーリシャスの一人当たりの GNI は、8627米ドル（2020年：世銀）であり、DAC 基準では高所得国に分類されている。

●2022年「経済自由度指数」では180か国中30位（日本は35位）でアフリカ第1位。2020年の世銀の Doing Business ランキングではサブサハラ・アフリカ中第 1 位（全体で13位、日本は29位）にランクされ、アフリカ諸国の中では非常に良好な投資環境を有している。

●インド洋に燦然と輝く民主国家モーリシャスは、主要産業である製糖から観光・金融・情報通信技術への産業多角化を図ることで発展を遂げた。現在では従来の対欧州貿易に加え、アフリカへの投資拠点・ゲートウェイとなるべく、アフリカ戦略を掲げている。

【ビーチリゾート】

●見事な裾礁があり高級ビーチリゾートとして世界的に有名。

●詩人ボードレールはかつてモーリシャスに滞在し、「レースに縁取られた島」とその美しさを詠い、また作家マーク・トゥエインも「神は最初にモーリシャスを創り、それを真似て天国を創造した」とモーリシャスの景観に賛辞を送っている。

【絶滅鳥ドードー】

●モーリシャスに生息していた固有種で、１６８１年に発見後、わずか１００年あまりで絶滅した。固有種を絶滅に追い込む人間の非業さを物語るものとして扱われ、アメリカ英語では、「ＤＯＤＯ」の語は「滅びてしまった存在」の代名詞。

●１６４７年、１羽のドードーが東インド会社によって長崎に渡った。

●飛ぶことも早く歩くこともできない巨大な鳥で、ドードーの由来は、ポルトガル語で「のろま」という説と、鳴き声を模したものという説がある。日本語では「愚鳩（グキュウ）」と呼称される。

　絶滅の原因は、入植者が持ち込んだ豚や鼠による雛や卵の捕食。巣を地上に作るため、外来の捕食者にとって雛や卵をとるのは容易であった。

【2つの世界（文化）遺産】

●2006年に登録された「アプラヴァシ・ガート」（Aapravasi Ghat）は、首都ポートルイスにあるインドからの移民受入に使用された建造物群の総称である。モーリシャスでは1835年の奴隷制廃止の結果、製糖業での労働力不足が深刻なものとなり、農園主たちにより、約50万人のインド人が契約労働者としてアプラヴァシ・ガートに到着し、国内の製糖業に

従事したほか、レユニオンやオーストラリア、アフリカ諸国へと移動していった。

●「ル・モーンの文化的景観」（Le Morne Cultural Landscape）は、２００８年に登録された。ル・モーン山は、モーリシャス島の南西部に位置する半島にある岩山で、深い木々と急峻な地形に守られたこの岩山は奴隷制下において逃亡した奴隷たちの隠れ場所だった。モーリシャスで奴隷制が廃止された際、警官隊がル・モーンに赴き、君たちは自由になったのだと呼びかけたが、警官隊の来訪理由を誤解し、岩山から飛び降りて亡くなった奴隷もいたといわれている。ル・モーンは自由を求めた奴隷たちの戦いのシンボルとして知られている。

【ペリー提督の寄港】

●ペリー提督率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊が日本に開国を要求するために浦賀沿岸に来航した際(1853年)、事前に、モーリシャスに寄港している。ペリー提督がアメリカを出港した当時、太平洋上には蒸気船が石炭を補給するのに適当な島が存在せず、またサンフランシスコ港が完成していなかったことから、大西洋を経て、マディラ島、セントヘレナ島、ケープタウンに寄港しつつ、1853年2月18日、モーリシャスへ到着し、10日間の休養を取った。

【生駒巡洋戦艦の寄港】

●1910年、戦艦生駒がアルゼンチン独立100周年式典参加に向かう途中で日本船として初めて寄港。小島にもかかわらず当時すでに軽便鉄道が敷設され、180台もの自動車が走っている文明国だった。

（当時の東京には100台の自動車しかなかった。）

【日本の格闘技】

●モーリシャスでは、独立前の1960年より空手や柔道が広まり、現在においても人気のスポーツである。日本の漁業関連者が指導したことが始まりだったと言われている。

（了）